

江戸時代から続く街道の宿場町

—いろいろな宿場町の特徴—

内山 敏典

はじめに

筆者はこれまで「まちおこし」に関連する冊子を多く上梓してきた。それについては“地域史と統計処理のさわらラボ”のホームページ <http://www.ut.saloon.jp/index10.htm> に10冊子のタイトルである『早良逍遥マップ記』、『続早良逍遥マップ記』、『福岡都市圏歴史散策マップ記』、『福岡（筑前）および関連地域の歴史散策マップ記—とくに高取焼および元寇を例とした「まちおこし」のための文化・歴史について』、『旧三瀬街道とその周辺逍遥マップ記—伊能忠敬一行の測量から200年を経過して—』、『唐津・多久・大町地域周辺散策記—歴史的遺産を通じて、現在・過去・未来を考える—』、『路地から見る歴史と文化—「まち」おこしとしての財産を活かすため—』、『筑紫国（福岡県）周辺の古代城跡からみる歴史—「まち」おこしとしての財産を活かすため—』、『西油山および荒平山周辺の歴史散策マップ記』および『早良逍遥マップ記拾遺—中世および近世の灌漑用水とその関連遺構—』それぞれにリンクをしているので、内容をご覧いただきたい。これらの10冊はそれぞれの地域で取り上げた歴史的遺産について述べるとともに、「観光資源および地域教育などとしての可能性を考える資料となるものである。

一般的に、わが国においては、大都市地域を除けば、「まちおこし」が各地域の観光資源の掘り起こしの一つとしてそれを活かしてきている。わが国のインバウンド需要は訪日外国人数と関連があるが、訪日外国人数は2010（平成22）年の8,611,175人から2018（平成30）年までの31,882,049人と急速に増加してきた。ところが、2019（平成31）年後半からのコロナ禍によって訪日外国人数は急激に減少し始め、入国できない状況が続いてきた。2022（令和4）年10月以降、入国規制が緩和されつつあるが、中国からの訪日はいまだにほとんどない。しかしながら、インバウンド需要がコロナ禍前の状態までに回復したとしても、それは金融緩和政策による円安ドル高によるものであり、またインバウンド需要がいつまで続くかは不透明である。コロナ禍によって経済への影響はインバウンド需要構造の変容をもたらしており、ひいてはわが国の経済構造に大きな影響をもたらしていることは否定できない。

一方、国内観光需要は、わが国の人口と関係があることは周知のことである。わが国の総人口は、戦争時を除き、1872（明治5）年の約35,000,000人から2008（平成20）年の128,084,000人ピークまで増加し、その後減少傾向にある。また、わが国では1997（平成9）年に子どもの数が高齢者人口よりも少なくなっており、少子化の進行が生じてきた。そして2001（平成13）年以降になると高齢化の進行が進み、いわゆる“少子高齢化”の進行が激しくなってきた。すなわち、わが国では人口減少に少子高齢化が加わり、今後の経済政策の在り方が問われることになるであろう。日本銀行の金融緩和政策による金利の低下で企業は資金調達が可能となる。とくに、米国の金融引締め政策（金利の引き上げ）との関係でいえば、わが国は急激な円安になり原油および小麦などの輸入品価格の上昇に伴う物価上昇となっている。しかしながら、本来の意味における物価上昇ではなく、わが国の賃

金上昇に繋がらない物価上昇であり、低所得者層にとっては低金利が生活水準の低下に繋がっているであろう。ところで、金融緩和政策による金利の低下は外国人技能実習生などの外国人労働者が他の国にシフトし、わが国の労働市場に与える負の影響は大きいであろう。また、最近のロシアによるウクライナ侵攻にみるように、とくに日本や西欧諸国はエネルギー高騰による物価高をもたらされている。そして、西側諸国といくつかの資源国である専制国家との間に企業誘致に関し負の問題を生じさせている。

インバウンド需要の減少や人口減少傾向のわが国における経済社会活動の参考になるのは江戸時代である。江戸時代の初期を除けば、江戸時代の 265 年間の総人口はほぼ 30,000,000 人前後であったし、一部を除けば鎖国政策をとっていた。人口は生産の担い手であり、消費の担い手でもある。しかし、この期間の人口増加がほぼ一定での状況のなかで自然災害が生じるなど、さまざまな改革（享保の改革、田沼意次の改革、寛政の改革および天保の改革）がおこなわれてきた。本冊子の目的とは異なるので、これらの改革については取り上げない。本冊子では人口停滞の江戸時代において、経済の発展が見られた在郷いわゆる日本式プロト工業やそれに関連する宿場町について取り上げる。宿場町では人口移動による増加がみられている。この江戸時代の宿場町がコロナ禍以降の「まちおこし」のヒントとなるであろう。最近のインバウンド需要は、SNS（Social Networking Service）などによる観光情報が外国人リピーターを喚起するものと思われる。その理由として、リピーターは都市における既存の観光ルートではなく、日本の原風景がある地方の観光資源に目を向けているものと思われる。

江戸時代の都市や町の人々の暮らしはあらゆる物を再生し、修理して再利用がなされていたし、当時の庶民の狭い家屋や火災の問題もあり、損料屋（生活必需品のレンタル業）が欠かせない存在であった。これらのことは、現在の SDG s（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）のカーボンニュートラル問題の解決のヒントに繋がるであろう。そして、この江戸時代の宿場町それぞれの特徴を学ぶことがコロナ禍以降の「まちおこし」のヒントとなることを期待したい。

要するに、江戸時代は鎖国経済下において人口が一定で、損料屋（レンタル業）およびリサイクルによる SDG s の経済である。それに加えて、在郷（宿場町）に移動的人口増加ある日本式プロト工業化があり、いまでいう宿場町独自の伝統的技術の発展があったといえる。現在のわが国において、宿場町はその周辺地域を含めてそのなごりを有す観光資源となっている。

“地域史と統計処理のさわらラボ”のホームページ <http://www.ut.saloon.jp/index10.htm>
の QR コード



目 次

はじめに-----	i
I 部 わが国経済社会の現在と過去-----	1
1. わが国の現在の状況-----	3
2. わが国の過去の現状-----	5
II 部 街道と宿駅-----	9
1. 宿駅傳馬制度に基づく各街道の整備について-----	11
III 部 現在の各宿場と歴史的背景-----	15
長崎街道について-----	17
1. 内野宿（福岡県飯塚市内野）-----	19
2. 山家宿（福岡県筑紫野市大字山家）-----	29
3. 原田宿（福岡県筑紫野市）-----	31
4. 塩田宿（佐賀県嬉野市塩田町大字馬場下甲）-----	32
5. 他の長崎街道の写真-----	38
秋月街道について-----	41
1. 秋月宿（福岡県朝倉市秋月）-----	43
唐津街道について-----	51
1. 芦屋宿（福岡県遠賀郡芦屋町）-----	53
2. 他の唐津街道の写真-----	57
三瀬街道について-----	59
1. 金武宿（福岡市西区金武）と飯場宿（福岡市早良区飯場）-----	61
中山道について-----	67
1. 草津宿（滋賀県草津市草津）-----	69
東海道について-----	75
1. 品川宿（東京都品川区旧東海道：北品川駅から青物横丁駅付近まで）-----	77
その他の宿場町について-----	83
1. 筑後吉井宿（福岡県うきは市吉井町）-----	85
2. 肥前浜宿（佐賀県鹿島市浜町）-----	86
おわりに-----	89
著者紹介-----	90

I 部 わが国経済社会の現在と過去

1. わが国の現在の状況

まえがきで述べた、インバウンド需要に関する訪日外国人数は表 1-1 である。表 1-1 の推移を図に示したのが図 1-1 である。

表 1-1. 各世界地域別および総数の訪日外国人数の推移 (単位:人)

年度	総数	アジア計	ヨーロッパ計	アフリカ計	北アメリカ計	南アメリカ計	オセアニア計	無国籍・その他
2003	5,211,725	3,511,513	648,495	19,015	798,358	25,987	206,994	1,363
2004	6,137,905	4,208,095	726,525	19,520	923,836	27,238	231,877	814
2005	6,727,926	4,627,478	798,791	23,655	997,809	34,331	244,894	968
2006	7,334,077	5,247,125	797,961	21,896	1,001,501	33,799	230,747	1,048
2007	8,346,969	6,130,283	877,531	23,408	1,017,018	37,001	260,788	940
2008	8,350,835	6,153,827	886,723	24,498	967,125	38,567	278,988	1,107
2009	6,789,658	4,814,001	800,085	20,621	874,617	33,481	246,213	640
2010	8,611,175	6,528,432	853,166	22,665	905,896	39,481	260,872	663
2011	6,218,752	4,723,661	569,279	19,361	685,046	31,762	189,150	493
2012	8,358,105	6,387,977	775,840	24,725	876,401	51,151	241,513	498
2013	10,363,904	8,115,789	904,132	26,697	981,981	49,930	284,886	489
2014	13,413,467	10,819,211	1,048,731	28,336	1,112,317	56,873	347,339	660
2015	19,737,409	16,645,843	1,244,970	31,918	1,310,606	74,198	429,026	848
2016	24,039,700	20,428,866	1,421,934	33,762	1,570,420	77,958	505,638	1,122
2017	28,691,073	24,716,396	1,525,662	34,803	1,756,732	92,106	564,527	847
2018	31,191,856	26,757,918	1,720,064	38,151	1,939,719	104,804	630,527	673
2019	31,882,049	26,819,278	1,986,529	55,039	2,187,557	111,200	721,718	728
2020	4,115,828	3,403,547	240,897	7,840	284,829	18,222	160,386	107
2021	245,862	150,427	52,238	6,769	26,238	5,204	4,953	33

資料:「日本政府観光局(JNTO)」より作成。

図 1-1. 各世界の地域別および総数の訪日外国人数の推移

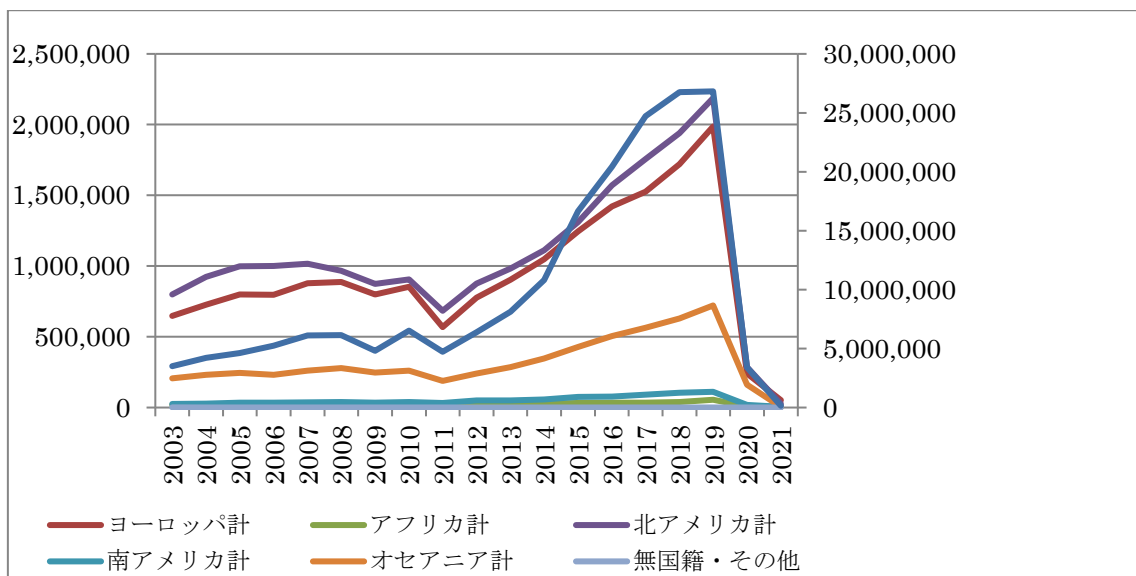


表 1-1 および図 1-1 にみるように、訪日外国人数の総数の推移は 2019（令和元）年まで大きく増加してきたが、世界的なコロナ禍で各国からの入国規制をおこなったことにより 2020（令和 2）年より急激に落ち込んでいる。2022（令和 3）年になり、国内外の規制緩和が図られるようになってきたので、訪日外国人の観光客が見られるようになってきたが、これまで多くを占めていた中国からの訪日がないし、コロナ禍前の観光需要構造と異なってきているであろう。

国内観光需要は人口と関連性がある。表 1-2 はわが国の総人口の推移である。わが国の人口は、長期的にみると、継続的な増加率で増加し、その人口増加を上回る率で国内総生

表 1-2. わが国の総人口の推移

(単位：人)

年	総人口	年	総人口
1920	55,963,053	1983	119,536,000
1925	59,736,822	1984	120,305,000
1930	64,450,005	1985	121,048,923
1935	69,254,148	1986	121,660,000
1940	73,075,071	1987	122,239,000
1945	71,998,104	1988	122,745,000
1950	84,114,574	1989	123,205,000
1951	84,541,000	1990	123,611,167
1952	85,808,000	1991	124,101,000
1953	86,981,000	1992	124,567,000
1954	88,239,000	1993	124,938,000
1955	90,076,594	1994	125,265,000
1956	90,172,000	1995	125,570,246
1957	90,928,000	1996	125,859,000
1958	91,767,000	1997	126,157,000
1959	92,641,000	1998	126,472,000
1960	94,301,623	1999	126,667,000
1961	94,287,000	2000	126,925,843
1962	95,181,000	2001	127,316,000
1963	96,156,000	2002	127,486,000
1964	97,182,000	2003	127,694,000
1965	99,209,137	2004	127,787,000
1966	99,036,000	2005	127,767,994
1967	100,196,000	2006	127,901,000
1968	101,331,000	2007	128,033,000
1969	102,536,000	2008	128,084,000
1970	104,665,171	2009	128,032,000
1971	105,145,000	2010	128,057,352
1972	107,595,000	2011	127,834,000
1973	109,104,000	2012	127,593,000
1974	110,573,000	2013	127,414,000
1975	111,939,643	2014	127,237,000
1976	113,094,000	2015	127,094,745
1977	114,165,000	2016	127,042,000
1978	115,190,000	2017	126,919,000
1979	116,155,000	2018	126,749,000
1980	117,060,396	2019	126,555,000
1981	117,902,000	2020	126,146,099
1982	118,728,000	2021	125,502,000

資料：総務省統計局 ホームページ (www.stat.go.jp) より作成。
10月1日の人口

産（GDP：Gross Domestic Product）が増加してきた。「まえがき」に示しているように、わが国で統計が整備され始めた1872（明治5）年の総人口は3,500万人、100年後の1972（昭和47）年の総人口は1億760万人であった。この期間の年平均成長率（複利計算）で求めると約1.13%である。なお、1955（昭和30）年頃から1973（昭和48）年ごろまでが高度経済成長期であった。この期間は日本の人口構成は少子高齢化ではなく、活気あふれた経済の期間であった。この人口増加を支えるにはGDPが必要であるが、1885（明治18）年から1970年（昭和45）年までの85年間の年平均成長率のGDPは3.48%であった^{注1}。総人口増加は2011（平成23）年ごろから減少傾向を示し、少子高齢化と相俟って、わが国の経済社会政策の課題となっている。本冊子では少子高齢化はマスコミ等で日常的に使用されているので、表で示すデータとして本冊子では取り上げない。高齢化社会から高齢社会に到達する期間は、国際比較で用いられるのが倍加年数で、わが国は65歳以上が1970年の7%から1994年の14%の24年間で達している。ドイツ、イタリアおよびイギリスが40年から61年かけて達成され、フランスにおいては115年かけて達する計算となる。

ところで、インバウンド減少や人口減少のわが国における経済活動の参考になるのは、江戸時代である。表1-3は徳川幕府期の各地域人口と総人口である。江戸時代は、各地域によって人口変動が若干あるが、ほぼ3,000万人と人口一定である。このように、人口は一定であるが地域別に変動があるということは、そこに江戸時代特有の制度的なものが関係していると思われる。経済活動には陸路や海路の交通網の果たす役割が必要である。

2. わが国の過去の現状

律令制下には五畿（山城、大和、摂津、河内および和泉の五カ国）と七道（山陽道、東山道、東海道、北陸道、南海道、山陰道および西海道）があり、京または大宰府を起点として各国府に放射する駅路である。西海道を除く六駅路の始駅は、都の羅城門を発して五機内を出た最初の駅がこれにあたる。駅路は、都と全国の各国府（国衙：こくが）と結ぶ幹線で、この間を連絡するのが駅、その施設を駅家（えきか）であるが、ここでは駅家・駅子（えきし）が業務にあたり、これを搬出する駅戸（えきこ）には駅田（えきでん）が与えられている。駅路以外に、これを補完するものに伝路があるが、この伝路は国衙と各郡を統括する郡司がいる郡衙（郡家）とを結んでいる^{注2}。

江戸幕府は、関ヶ原戦いの翌年である1601（慶長6）年について、宿駅傳馬制度を定め、続いて江戸を中心とする街道を整備してゆき、中山道、日光街道、奥州街道および甲州街道とそれに関係する街道が整備されていっている。それぞれの街道は、整備以前から律令制度下と同じような経路を通る道があり、それを活用しながらの整備となっている。古い道は、とくに戦国時代のように戦いのための見通しや、攻撃しやすいように尾根道を整備していたが、江戸時代の平時になると谷道を通る方が利便性に優れているために、そのよ

うな整備に至ったものと思われる。原則として隔年交代に石高に応じた人数を率いて出府（しゅつぶ：地方から都に出ること）し、江戸屋敷に居住して将軍の統帥下に入る制度。初め期限は定まっていなかったが、1635（寛永 12）年外様大名の、1645（正保 2）年譜代大名の交代期限を定めている^{注3)}。2年ごと江戸に参観し、1年経過したあと自らの領地へ戻る交代制度である。

表 1-3. 徳川幕府期の各地域人口と総人口 (単位：千人)

西暦	元号	北海道	東奥羽	西奥羽	北関東	南関東	北陸	東山	東海
1600	慶長5年	7.1	734.4	338.5	714.3	1304.6	864.2	428.1	1081.3
1721	享保6年	18.7	2355.4	1053.2	2210.3	3938.1	2586.8	1262.6	2642.2
1750	寛延3年	26.2	2203.4	1015.5	2143.0	3913.8	2592.6	1284.2	2710.1
1756	宝暦6年	27.2	2167.4	1006.1	2106.4	3865.9	2655.5	1319.1	2691.8
1786	天明6年	31.6	1876.5	965.9	1766.6	3484.2	2530.1	1328.6	2718.8
1792	寛政4年	32.9	1881.9	980.1	1696.6	3464.9	2628.0	1290.1	2585.8
1798	寛政10年	34.5	1906.9	1023.6	1704.2	3516.4	2723.3	1358.1	2754.7
1804	文化元年	54.5	1923.5	1044.2	1664.4	3490.5	2769.3	1353.4	2775.3
1822	文政5年	74.3	1980.8	1091.1	1617.1	3474.3	3013.7	1391.4	2973.0
1828	文政11年	78.0	2016.1	1135.1	1603.3	3609.4	3117.9	1536.0	2950.1
1834	天保5年	81.4	2028.6	1129.1	1501.7	3502.8	3169.0	1464.4	2940.9
1840	天保11年	77.2	1807.4	999.2	1552.2	3605.1	2881.4	1390.1	2821.2
1846	弘化3年	85.1	1929.5	1094.9	1594.2	3731.9	3041.4	1429.6	2920.9
1873	明治6年	123.7	2306.0	1197.9	1664.7	3555.7	3309.3	1386.7	2822.4

西暦	元号	畿内	畿内周辺	山陰	山陽	四国	北九州	南九州	総人口
1600	慶長5年	2284.6	1397.5	412.1	815.2	625.0	797.5	468.6	12273.0
1721	享保6年	2699.8	3380.2	1174.1	2428.8	1838.6	2385.1	1304.7	31278.6
1750	寛延3年	2567.4	3200.1	1236.3	2445.1	1874.7	2392.5	1405.9	31010.8
1756	宝暦6年	2604.1	3294.9	1270.6	2488.0	1929.0	2434.1	1422.2	31282.3
1786	天明6年	2449.6	3213.9	1304.8	2567.9	1993.8	2382.4	1489.1	30103.8
1792	寛政4年	2432.8	3135.8	1305.0	2557.7	1989.4	2398.6	1490.3	29869.9
1798	寛政10年	2458.6	3124.3	1375.7	2657.5	2043.1	2390.8	1493.8	30565.5
1804	文化元年	2420.8	3119.1	1391.0	2668.2	2112.6	2453.9	1505.7	30746.4
1822	文政5年	2479.2	3246.1	1475.1	2822.1	2235.9	2455.6	1584.0	31913.7
1828	文政11年	2519.6	3264.5	1502.6	2910.3	2276.3	2501.9	1604.8	32625.9
1834	天保5年	2492.7	3217.2	1532.2	2957.5	2319.4	2531.1	1608.6	32476.6
1840	天保11年	2322.4	3121.5	1385.7	2800.9	2260.2	2483.1	1594.5	31102.1
1846	弘化3年	2398.5	3206.6	1450.7	2920.6	2331.8	2548.4	1613.3	32297.4
1873	明治6年	2036.8	3024.9	1338.5	2911.1	2459.2	2857.1	2139.9	33133.9

注：15地域の国別（府県別）構成

- 北海道：蝦夷（北海道・千島・樺太）
- 東奥羽：陸奥（青森・岩手・宮城・福島）
- 西奥羽：出羽（秋田・山形）
- 北関東：常陸・上野・下野（茨城・栃木・群馬）
- 南関東：安房・上総・下総・武蔵・相模（千葉・埼玉・東京・神奈川）
- 北陸：佐渡・越後・越中・能登・加賀・越前・若狭（新潟・富山・石川・福井）
- 東山：甲斐・信濃・飛騨（山梨・長野）
- 東海：伊豆・駿河・遠江・三河・尾張・美濃（静岡・愛知・岐阜）
- 畿内：大和・山城・摂津・河内・和泉（京都・大阪・奈良）
- 畿内周辺：近江・伊賀・伊勢・志摩・紀伊・淡路・播磨（滋賀・三重・和歌山・兵庫）
- 山陰：丹後・但馬・因幡・伯耆・隠岐・出雲・石見（島根・鳥取）
- 山陽：美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門（岡山・広島・山口）
- 四国：阿波・讃岐・伊予・土佐（徳島・香川・愛媛・高知）
- 北九州：筑前・筑後・肥前・豊前・豊後（福岡・佐賀・北九州・大分）
- 南九州：肥後・日向・大隈・薩摩（熊本・宮崎・鹿児島）

資料：鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社2000年10月.PP.16-17.より作成。

前述の如く、江戸時代 265 年間の人口は 3000 万人前後で停滞していた^{注4)}。人口は生産の担い手であるとともに、消費の担い手でもある。一般的に人口停滞は、経済成長もなく、また文化の成長もないであろう。江戸時代は、江戸および大坂など都市部を除けば、日本の西南部の在郷町には旅籠屋・質屋・酒造業を営み、生糸・呉服を扱うという商人が生まれ、これにともなってそこで働く使用人を雇用しているので人口増加があった。この人口増加は自然増加ではなく、農村からの社会増加に基づくものである。この期間の在郷町の発展は、すべてではないが徳川時代の参勤交代との関連がある。この在郷町は西欧でいうプロト工業化（結婚年齢の低下→出生率の上昇→人口増加）に類似するものであり、江戸時代はその地域内の結婚年齢低下という要因はあてはまらず、農村を含む周辺地域からの流入による出生率の増加による人口増加があったからであると思われる^{注5)}。

江戸時代の庶民はあらゆる物を再生し、修理して再利用がなされていたし、当時の庶民の狭い家屋と火災の問題もあり、損料屋（生活必需品のレンタル業）が欠かせない存在であった。江戸時代は多くの物が人力による手工業でなされ、無駄な製品を作ることはなかった。この廃棄物がでなかったのはあらゆる資源をリサイクルして再利用している。江戸、大坂および博多などのような都市部ではゴミ問題が生じる場合もあったが、ゴミは埋め立てて新田にしている。また、不用品を買い取る業者がいてリサイクル業をおこなっていた。また、武家社会においては献残屋（けんざんや）があり、武家社会で横行していた贈答品を安く買い集め、別の武家に安く売り贈答品として利用している^{注6)}。

注

注1) 参考文献[5]の13頁の国民総生産（GNP: Gross National Product）の数値から年平均成長率を求めた。このGNPをGDPとしている。

注2) 参考文献[1]の8～9頁から引用。

江戸時代の宿駅制とくに参勤交代制は、律令制下の駅路と伝路をベースに整備され、五街道に加えて新たなる街道や脇街道、また海路も充実していている。

注3) 参考文献[3]の1105頁から引用。

参勤交代：江戸幕府が諸大名および交代寄合（こうたいよりあい：3000石以上で無役）の旗本に課した義務である。寄合旗本は老中支配で、大名の名跡を継ぐ家、名家の子孫、大名分知による取り立てなどの由来があり、3000石未満の小普請身分の者もある。

<https://kotobank.jp>>交代寄合-62685より引用。

注4) 参考文献[2]の16～17頁を参照。

注5) 参考文献[6]の241-242頁を参照。

注6) 参考文献[7]および[8]から引用。

参考文献

- [1] アクロス福岡文化誌編纂委員会編『街道と宿場町』海鳥社, 2007年2月.
- [2] 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫. 2000年10月.
- [3] 新村 出編『広辞苑 第五版』岩波書店, 2006年1月.
- [4] 西川俊作『経済学 (第2版)』東洋経済新報社, 1983年3月.
- [5] 西川俊作『日本経済の成長史』東洋経済新報社. 1996年4月.
- [6] 高橋美由紀「都市化する郡山上町—人口増加の内容—」『国際日本文化研究センター紀要』19巻, 1999年6月.
- [7] 山本一力『損料屋喜八郎始末控え』文藝春秋, 2009年3月.
- [8] 山本博文『江戸の銭勘定—庶民と武士のお金のはなし—』洋泉社, 2017年1月.

II部 街道と宿駅

1. 宿駅傳馬制度に基づく各街道の整備について

江戸幕府（徳川家康）は、関ヶ原戦いの翌年である 1601（慶長 6）年に宿駅傳馬制度を定め、続いて江戸を中心とする街道を整備して行き、中山道、日光街道、奥州街道および甲州街道とそれに関係する街道を整備していつている。

江戸時代の江戸日本橋を起点に、東海道（京都三条大橋までの 492 k m : 53 宿）、中山道（江戸・京都間の別ルートで 526 k m : 69 宿）、甲州街道（甲府まで行き、下諏訪で中山道と合流の 209 k m : 45 宿）、日光街道（宇都宮を經由して日光東照宮までの 147 k m : 21 宿）および奥州街道（宇都宮を經由して白河までの 192 k m : 27 宿）の基幹街道（五街道）があり、その他に仙台松前道（白河から三厩までの 530 k m : 約 86 宿）、水戸街道（千住から水戸までの 116 k m : 20 宿）、三国街道（中山道の高崎から越後の寺泊までの 198 k m）、北国脇往還（中山道の追分から直江津または高田までの 130 k m : 19 宿）、北陸道（直江津から近江の鳥居本までの 480 k m : 約 50 宿）、伊勢街道（東海道の日永の追分から伊勢までの 74 k m : 7~9 宿）、山陽道（京都から下関までの 550 k m : 50 宿）および山陰道（京都から下関の日本海側ルートの 610 k m : 約 31 宿）などの代表的な脇往還がある^{注1)}。

九州地方諸大名の参勤交代ルートは、大坂以西は瀬戸内海通行が主であったが、次第に山陽道（中国路）の利用が増えてきたとのことである。たとえば、福岡藩は江戸時代前期・中期には海路を通行し、後期には現在の関門海峡周辺のみを船を利用している。また、佐賀藩においても、この時期に山陽道通行への移行がなされている^{注2)}。このように陸路に移行していくのは海難事故などの気象条件に左右され期日までに江戸に到着できるかの危険性があったし、費用面でも大変であったのであろう。

筑前・豊前には長崎街道（長崎路）、唐津街道、秋月街道、日田街道および薩摩街道がある。また、参勤交代ルート以外に三瀬街道がある。

長崎街道は山陽道に繋がる脇街道で、小倉から長崎までの 57 里（224 k m : 25 宿）があった。長崎街道については、参勤交代の大名や長崎出島のオランダ館長はこの街道を通っている。その際、館長に随行した人々にドイツ人医師のケンペル（Engelbert Kämpfer、1651~1716 年：ドイツの哲学者、医学者および歴史学者で『日本誌』それを抄訳したものが『江戸参府旅行日記』を刊行）^{注3)}、オランダ商館のツェンベルク（ツェンベリー：Carl Peter Thunberg、1743~1828 年：スウェーデン生まれの医師および植物学者で、帰国後『日本植物誌』と『江戸参府随行記』を刊行）^{注4)} およびシーボルト（Siebold : Philipp Franz von Siebold、1796~1866 年：ドイツ生まれの医者で 1823 年長崎出島のオランダ医官として着任。長崎で診療所兼鳴滝塾を開き、医療のかたわら日本の自然・人文資料を集めて研究、帰国の際、国禁の地図などを所持していたかどで国外追放、『江戸参府紀行』、『日本』、『日本動物誌』および『日本植物誌』を刊行）^{注5)} がおり、長崎街道を通過して参府している。かれらは、参府の際、日本に関してあらゆる角度からの研究を行っている。

唐津街道については、古から九州北部の玄界灘沿岸の重要な交通路で、江戸時代にも整

備された街道の一つで、筑前国福岡領の若松から筑前国博多等を経由して肥前国松浦郡唐津（現；唐津市東城内）までの約 114 k m で、長崎街道の脇街道としての役割のほか、福岡藩、唐津藩、平戸藩、五島藩および大村藩など九州の西側の大名の参勤交代にも利用されている。唐津街道は、太閤道（名護屋城へ通じる道）とも関連しているし、長崎街道の大里、小倉、黒崎、木屋瀬から西に分かれて赤間（唐津街道）へのルートもあった^{注6)}。

三瀬街道は筑前国唐津街道藤崎の追分から佐賀城下の長崎街道（龍造寺神社および日新小学校：築地反射炉付近）のに突き当たる。三瀬街道の起点は藤崎の追分も大正時代の地図に掲載の街道の起点は早良区高取 2-17-49 付近と明治時代の地図に記載の街道の起点は高取 1-28-24 付近である。江戸時代はこの辺りの地形は不明であるが 2 つの起点の距離はわずかである。佐賀の方も明確な終点は明らかでなく、長崎街道に接続する付近とした。その距離は約 46 k m である。このルートには金武宿と山間部の飯場宿があり、肥前から筑前へは米や木炭などが金武宿に毎日馬十頭以上で運ばれ、荷馬車に積み替えて福岡へ運ばれている^{注7)}。また、筑前から肥前へは海産物や塩などが運ばれていた。飯場宿は松原邸という泊施設が一軒あった。金武宿は馬や人足の手配をする人馬継所で、荷物を積んだ馬の往来が多く、木賃宿や染物屋、質屋および雑貨屋などが軒を連ねており、他の街道と異なるのは参勤交代などの通行とは異なり、武士や商人などの旅人が多かったとのことであった。この三瀬街道の宿場は通行量に対して規模が小さかったので、住民から通行をおさえるよう要望があったといわれている。この三瀬街道は伊能忠敬一行の測量日記にも記載されている。

秋月街道については、豊前国小倉藩（現小倉北区室町 2 丁目の常盤橋）から筑前国秋月藩を経由して筑後国久留米藩（久留米市御井町府中）までの約 71 k m である。秋月街道を利用していたのは人吉藩や熊本藩などの諸大名であり、九州内陸部の交通体系の整備および改変を必要とした。そのなかで重要な幹線は秋月街道であり、それを補完するのが唐津街道であり、これらの街道が初期の長崎街道の本道と副路をなしていたが、1611（慶長 16）年、1612（慶長 17）年、長崎街道のうち筑前六宿街道（冷水通り）が開通すると筑前内ではこの街道が秋月街道にとってかわっている。

注

注 1) <https://www.nippon.com/ja/japan-topics/c08604/> より引用。

脇往還の宿場数で約を付けているのは諸説あるためであり、距離については概数である（以下同じ）。

注 2) 参考文献[12]の 29 頁から九州地方諸大名の参勤交代ルートから引用。

注 3) 参考文献[17]の 281 頁より。

注 4) <http://www.qsr.mlit.go.jp/sakoku/activity/kaidou/bunmei/index.html> より引用。

注5) 参考文献[17]の359～360頁より。

注6) 参考文献[11]の4頁の「唐津街道と長崎街道・脇街道略図」より。

注7) 参考文献[21]の273頁より引用。

参考文献

- [1]青柳種信著 福岡古文書を読む会編校訂『筑前國續風土記拾遺』(上巻) 文献出版, 1993年4月.
- [2]青柳種信著 福岡古文書を読む会編校訂『筑前國續風土記拾遺』(中巻) 文献出版, 1993年5月.
- [3]秋月街道ネットワークの会編『秋月街道をゆく』海鳥社, 2001年11月.
- [4]アクロス福岡文化誌編纂委員会編『街道と宿場町』海鳥社, 2007年2月.
- [5]フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著、中井品夫・八城圀衛訳『日本一図録 第一巻・付図一』雄松堂書店, 1978年3月.
- [6]井上精三『博多郷土史事典』葦書房, 1987年11月.
- [7]貝原益軒編 伊東尾四郎校訂『増補 筑前國續風土記』(第四刷) 文献出版、2001年6月.
- [8]加藤一純・鷹取周成共編 川添昭二・福岡古文書を読む会編校訂『筑前國續風土記付録』(上巻) 文献出版、1977年2月.
- [9]加藤一純・鷹取周成共編 川添昭二・福岡古文書を読む会編校訂『筑前國續風土記付録』(中巻) 文献出版、1977年2月.
- [10]河島悦子『伊能図で甦る古の夢 長崎街道』ゼンリンプリンテックス, 1999年1月.
- [11]河島悦子『大里から博多へ そして唐津へ 唐津街道』海援社, 1999年12月.
- [12]南方長「萩藩参勤交代の行程—瀬戸内海通行から中国路通行への移行—」『山口県文書館研究紀要』通巻29号2002年3月.
- [13]丸山雍成・長洋一編『街道の日本史 48 博多・福岡と西海道』吉川弘文館, 2004年2月.
- [14]奥村玉蘭著 田坂大蔵・春日古文書を読む会校訂『筑前名所図会』文献出版、1985年2月.
- [15]尾崎秀樹・土田直鎮他編集『新潮日本人名辞典』新潮社, 1995年5月.
- [16]歴史学研究会編『日本史年表 第四版』岩波書店, 2001年12月.
- [17]三省堂編纂所編『コンサイス人名事典 (外国編)』三省堂,
- [18]内山敏典「旧三瀬街道とその周辺逍遙マップ記—伊能忠敬一行の測量から200年を経過して—」2015年4月.
- [19]佐久間達夫校訂・伊能忠敬『測量日記 第四巻』(九州第二次の一) 大空社、1998年6月.

[20]佐久間達夫校訂・伊能忠敬『測量日記 第五巻』（九州第二次の二）大空社、1998年6月.

[21]田中啓爾序・金尾宗平著『風土と生活 福岡縣地誌』刀江書院 1936年6月.

[22]ヨーゼフ・クライナー『ケンペルのみた日本』日本放送協会、1996年3月.

Ⅲ部 現在の各宿場と歴史的背景

長崎街道について

1. 内野宿（福岡県飯塚市内野）

筑前内野宿は筑前六宿（黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田）の一つで、1612（慶長 17）年に黒田長政公の家臣毛利但馬（母里太兵衛）が初めて町を立てている。但馬が益富城（別名大隈城、現在の嘉麻市中富の大隈天満宮一帯に築かれていた）の城主となった後、内野太郎左衛門がその任に当たっている。内野宿が拓かれる前は山谷のある村で、飯塚より山家に通る驛家である。この村は民家が多く、これより西へ山を越えて御笠郡山家の宿へ行く。いわゆる冷水越えであって内野村は存在していなかった。内野宿が拓かれたことにより、内野より飯塚へは13里7町、御笠郡山家へは2里21町となった^{注1)}。内野宿は人馬継所ならびに國君の行館があった^{注2)}。また、内野宿に宮谷山宗賢寺があるが、この寺は1641（寛永16）年2月に内野太郎左衛門が開基した。太郎左衛門没後、この寺に葬られている。宗賢はもと大庭氏であった。大庭氏は秋月家浪人の大庭内蔵助の孫にあたる内野太郎左衛門が長政公の命により、氏を内野と改めている^{注3)}。現在の内野宿は整備されていて、往時の町並みを感じさせている。その意味において、以下の宿の地図と写真は内野宿を中心に記載している。ただ、内野宿の西隣の山家宿とその隣の原田宿についても、参考文献に記述、現地の宿の説明板があるので、ここに記載して若干の写真を掲載している。

内野宿

北



内野宿の生業

8件	旅館	21件	農業
5件	飲食店	10件	大工
各3件	酒屋、風呂屋 農具屋	4件	日傭
		各3件	足軽、木びき、役人
各2件	質屋、畳屋、豆腐屋 看屋、飴屋、菓子屋 下駄屋、散髪屋 呉服屋、雑貨屋	各2件	あそび人、左官、馬方 車引
		各1件	先生、駕籠屋、郵便人 医者、桶屋 屋根フキ、うるしや 牛馬の鞍店
各1件	油店、紙屋、醤油屋 氷屋、石屋、葛屋 牛乳屋、銀細工、問 屋 茶屋、紺屋、麴屋		

資料：内野宿内の説明板より



内野宿割図とその説明板1



内野宿史跡と街道今昔図、内野下町



東構口跡（ひがしかまえぐちあと）



旅籠 若松屋跡



郡屋跡（ぐにやあと）



松屋（酒屋、酒造業）



内野下町付近



甘木屋跡



薩摩屋跡



人馬継所跡（角屋）



太宰府天満宮越道とえびす碑 1



旅籠 肥前屋



旅籠肥前屋 (現在 長崎街道内野宿展示館)



内野宿絵図



太宰府天満宮米山越道とえびす碑 2



内野小路



宗賢寺の説明板



伊能忠敬に関する説明板



庄屋敷跡



庄屋 山内家跡



内野 大イチョウ（県天然記念物）



内野 大イチョウ（樹年齢約400年、
樹高34.1m、幹周り7.6m）



盤石橋 (ばんじゃくきょう)



宗賢寺境内内三尺坊秋葉権現



宗賢寺境内



秋葉権現



内野宿割図とその説明板



小倉屋 (こくらや) とその説明板



酒屋 三次屋（みつじや）跡



旅籠 博多屋跡



脇本陣 長崎屋跡



町茶屋（脇本陣、下の茶屋）長崎屋跡



長崎屋跡



大庭家跡（伝承 伊能忠敬宿泊）



旅籠 大黒屋跡



酒造業 伊藤家跡



西構口跡 (にしにかまえぐちあと) 1



西構口跡 2



内野関屋跡



JR 筑前内野駅 1



JR 筑前内野駅 2



内野宿 (長崎街道) 街道今昔絵図



老松神社 (長崎街道) 1



老松神社 (長崎街道)

2. 山家宿（福岡県筑紫野市大字山家）

筑前山家宿を拓いたのは、1611（慶長16）年に黒田孝高、長政二代の藩主に仕え黒田25騎の一人である桐山丹波守（きりやまたんばのかみ）であった。その後、内野へ越える山道を広め冷水峠の道を完成させたのが志方彦太夫で、桐山丹波守の家臣であった。『筑前國續風土記』によれば、山家宿は「豊前小倉、黒崎、木屋瀬、飯塚。内野を経て山家宿に来る。この宿より西の原田に行き、それより肥前田代を過ぎて長崎方面に行く東西の通路の宿駅である。國君（こくくん：君主）の行館あり、民家多し。博多より二日市を経、甘木に行き、筑後豊後へ通る。南北の大道もこの宿の少し西にある。」と交通の要衝である^{注4)}。



山家宿郡屋跡の説明板



山家宿郡屋跡



構口の碑と初代代官桐山丹波遺蹟の碑



山家宿御茶屋（本陣）跡



山家宿代官所跡



山家宿下代官屋敷跡



日本唯一閨秀詩人原采蘋塾跡の碑



日本唯一閨秀原采蘋の漢詩

☆原采蘋[はら さいひん：1798（寛政 10）～1859（安政 6）年]筑前国秋月藩の儒者原古処の長女である。菅茶山（かん さざん）、頼山陽（らい さんよう）および梁川星巖（やながわ せいがん）などと交わり、相互に詩文を交換した。生涯独身生活を送り、母の死後旅に出て長州萩で病死している^{注5)}。

3. 原田宿（福岡県筑紫野市）

筑前原田宿を拓いたのは、説明板によれば黒田長政の側近であった小河内蔵充（おごうくらのじょう）で、天拝山の植林でも知られている。小河内蔵充は 1576（天正 3）年に現在の兵庫県印南野（いなみの）で生まれ、小田原城攻め[1590（天正 18）年]や文禄の役[1592（文禄元）年]では黒田孝高に従い、関ヶ原の戦い[1600（慶長 5）年]では長政、大坂冬の陣[1614（慶長 19）年]では忠之のもとで戦っている。それらの功績により筑前国内に 1 万 2 千石の領地を与えられているとのことである。また、原田宿は、『筑前國續風土記拾遺』によれば、慶長の頃まで原田村は筑紫村の内であった。後に分かれて別村となった。山家駅より肥前國田代駅に至る宿駅である。また、博多二日駅より田代へもこの原田を経由する。國君の行館あったし、近くには筑紫神社があり^{注6)}、東構口があったとされている。



JR 鹿児島本線と、筑豊本線（原田線）の終点



現在の筑前原田宿の町並み 1



現在の筑前原田宿の町並み 2

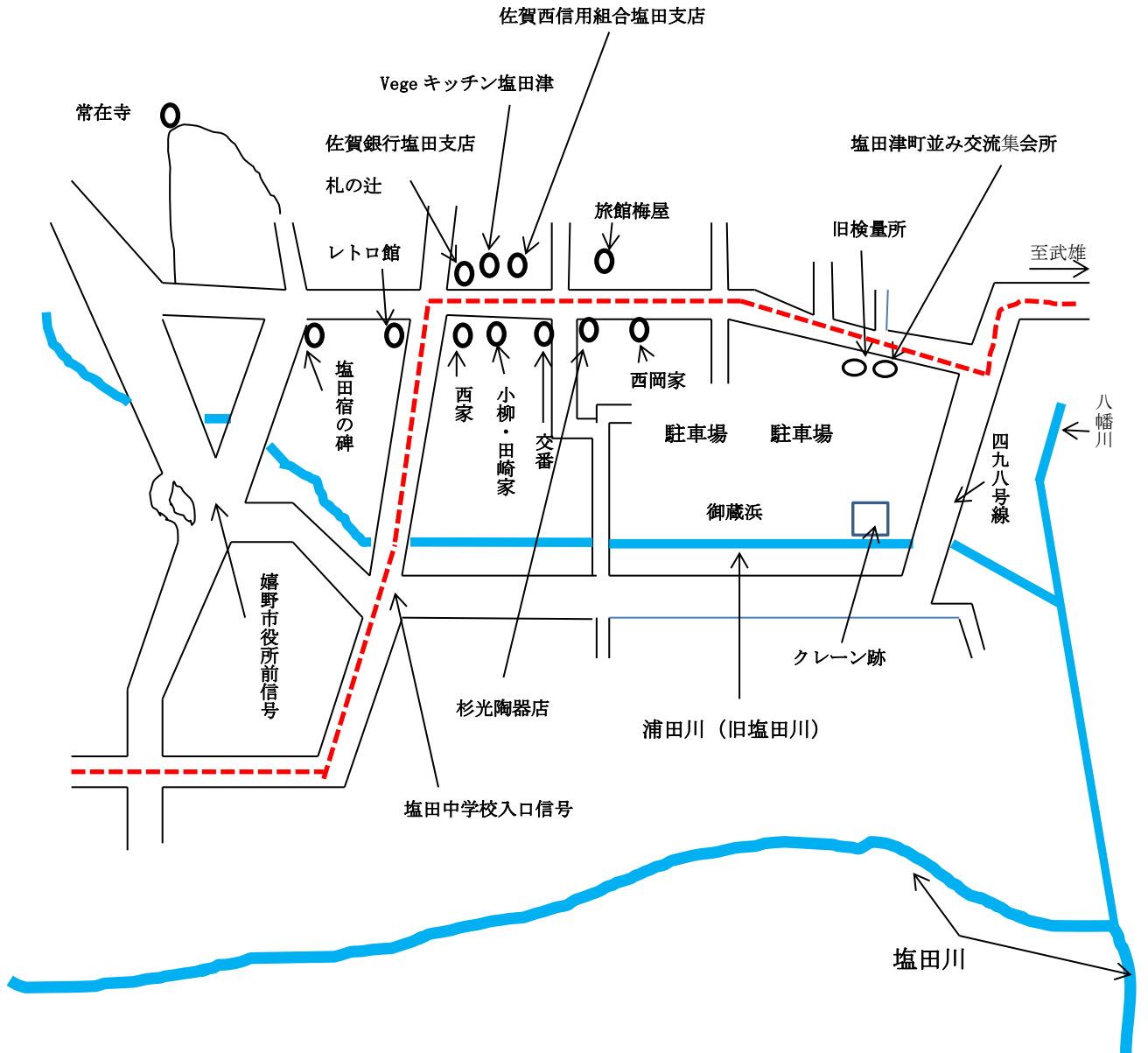
4. 塩田宿（佐賀県嬉野市塩田町大字馬場下甲）

塩田宿は塩田津ともいい、とくに江戸期になると長崎街道の宿場町として繁栄し、大小の町屋が軒を連ねた町並となっている。この宿には塩田川によって、多くの物資を船によって運んでいて、有明海に繋がる川港として発展してきた。そのことから塩田宿を塩田津といっている。塩田川の度重なる叛乱で、旅人は足止めされることが多く、18世紀前半頃より嬉野宿から武雄を通る塚崎道が主流となり、塩田宿は塩田道の2宿（もうひとつは鳴瀬宿）で脇街道を形成している^{注7）注8）}。

塩田津は、とくに江戸時代の1639（寛永16）年に佐賀藩の支藩である蓮池藩^{注9）}（はすいけはん：5万石）に組み込まれ、藩西部の行政拠点となっているとのことである。近代に入り、1905（明治38）年には武雄から塩田津を経由して鹿島の祐徳稲荷神社へ至る馬車軌道が全線開通している。そのために、塩田津の町並みは山側に約2間（約3.6m）家々が曳かれて現在の道幅になり、町並みはそのままのこったとのことであった。この軌道は、馬車から蒸気機関車（軽便鉄道）に変わり、1931（昭和6）年に廃止となり、バスでの運行となっている。また、1915（大正4）年から1932（昭和7）年まで、塩田と嬉野間で県内初の電車も走ったとのことである^{注10）}。

ところで、塩田津の町並みは居蔵屋（いぐらや：居蔵造の町屋が連なっている。これは18世紀の度重なる火災に強い家屋として、漆喰で固めた白壁造りの町屋ができていったとのことである。代表的な居蔵造の町屋として、西岡家（国指定重要文化財：1855（安政2）年に建てられた、切妻造・棧瓦葺・平入りの居蔵造の大型町屋で、江戸時代は廻船問屋）、杉光陶器店（国登録有形文化財：1855（安政2）年に建てられた入母屋造・棧瓦葺・妻入り3階建ての大型町屋で、蔵が一の蔵から三の蔵まであり、三の蔵は1910（明治43）年～1916（大正5）年まで志保田銀行として使用）、旧検量所（1949（昭和24）年に天草陶石の集荷施設として建築され、肥前陶土工業協同組合に使用され、河川敷には走行クレーン跡がある。船で天草陶石をトラックに積むために設置され、旧検量所横の鉄板部分でトラックごと計量）、小柳家・田崎家（19世紀前期に建てられた入母屋造・棧瓦葺・妻入りの3階建ての塩田津最大の居蔵屋で、呉服屋を営んでいる。また、1910（明治43）年に筑後柳河朝の株式会社柳河商業銀行の営業権を引受け、塩田に移転し株式会社塩田銀行に改称）、西家（18世紀後期に建てられた草葺き・クド造の町屋で、平成10年代まで代々菓子屋を経営）などがある^{注10）}。なお、36頁の写真のうち、旧検量所・交流会集会所横の塩田石（安山岩）は塩田津で石材業が盛んであったこと、天草陶石や対州石を原料として陶土や釉薬をつくり、有田・吉田・波佐見等に供給していたとのことである^{注11）}。

塩田宿



--- : 塩田道 (旧長崎街道)



塩田宿



常在寺



常在寺



レトロ館



塩田宿の町並み 1



塩田宿の町並み 2



2010年当時の杉光陶器店主屋保存修理工



2010年当時の佐賀銀行横の「札の辻」



御蔵・御蔵馬場・御蔵浜の場所の板



塩田宿の町並み3



佐賀銀行塩田支店(右奥)の前に「札の辻」
佐賀西信用組合塩田支店(右奥手前)



旅館 梅屋



Vega キッチン塩田津



奥が小柳家・田崎家、中は西家



旧検量所・交流会集会所横の塩田石



走行クレーン跡



西岡家住宅 1



西岡家住宅 2



御蔵・御蔵馬場・御蔵浜の場所の板（標識）



川へ通じるタナジ（石段）と石垣

5. 他の長崎街道の写真



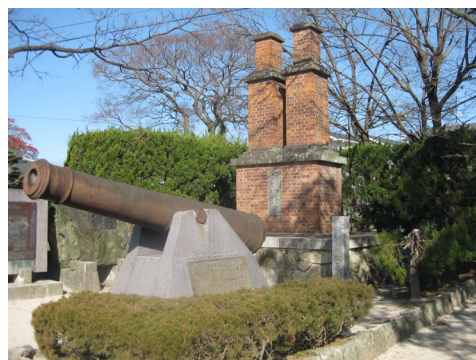
木屋瀬宿(北九州市八幡西区)



木屋瀬宿



のこぎり型家並み (佐賀市八戸 1)



佐賀藩の反射炉とカノン砲(佐賀市長瀬町 9-15 日新小学校内)



長崎歴史文化博物館・長崎奉行所立山役所跡 (長崎市立山 1-1-1)



長崎奉行所立山役所跡 (長崎市立山 1-1-1)



長崎・出島和蘭商館跡



出島和蘭商館跡

注

- 注1) 参考文献[2]の275頁を参照。
- 注2) 参考文献[1]の182-183頁を参照。
- 注3) 参考文献[3]の74-75頁を参照。
- 注4) 参考文献[2]の198頁を参照。
- 注5) 参考文献[6]の1018~1019頁を参照。
- 注6) 参考文献[1]の499-500頁を参照。
- 注7) 参考文献[7]の2頁参照。
- 注8) 参考文献[4]の165頁の略図を参照。
- 注9) 参考文献[5]の198~200頁を参照。
- 注10) 参考文献[7]の5頁と24~25頁の年表から引用。
- 注11) 参考文献[7]の21~22頁から引用。

参考文献

- [1]青柳種信著 福岡古文書を読む会編校訂『筑前國續風土記拾遺』(中巻) 文献出版, 平成5年5月.
- [2]貝原益軒編 伊東尾四郎校訂『増補 筑前國續風土記』(第四刷) 文献出版, 平成13年6月.
- [3]加藤一純・鷹取周成共編 川添昭二・福岡古文書を読む会編校訂『筑前國續風土記付録』(中巻) 文献出版, 昭和52年2月.
- [4]河島悦子『伊能図で甦る古の夢長崎街道』株式会社ゼンリンプリンテックス, 1999年1月.
- [5]木原武雄『風雲 肥前戦国武将史—戦国武将伝と山城散歩—』佐賀新聞出版社, 1995年1月.
- [6]三省堂編修所編『コンサイス 日本人名事典 (改訂新版)』三省堂, 1999年10月
- [7]塩田津町並み保存会編『居蔵造の町並み 塩田津—重要伝統的建造物群保存地区—』特定非営利活動法人塩田津町並み保存会, 2015年12月.

秋月街道について

1. 秋月宿（福岡県朝倉市秋月）

秋月街道については、豊前國小倉藩（現小倉北区室町 2 丁目の常盤橋）から筑前国秋月藩を經由して筑後国久留米藩（久留米市御井町府中）までの約 71 km である。秋月街道を利用してしたのは人吉藩や熊本藩などの諸大名であり、九州内陸部の交通体系の整備および改変を必要とした。そのなかで重要な幹線は秋月街道であり、それを補完するのが唐津街道であり、これらの街道が初期の長崎街道の本道と副路をなしていたが、1611（慶長 16）年、1612（慶長 17）年、長崎街道のうち筑前六宿街道（冷水通り）が開通すると筑前内ではこの街道が秋月街道にとってかわっている。以下はその中心となる秋月宿である。

秋月街道の近くにある秋月城（5 万石）は福岡藩の支藩として黒田氏が居城し、1873（明治 5）年に廃城となっている。黒田氏の前は秋月種実（あきづき たねざね）の時代が最盛期であった。1587（天正 15）年に豊臣秀吉の九州平定の軍勢が進軍した際に、種実は重臣の恵利暢堯（えり のぶたか）を秀吉のもとに派遣したが、暢堯が秀吉に降伏するように言い含められたと思い、暢堯は諫死（かんし：死んで種実をいさめた）、種実は島津氏とともに豊臣勢と戦い降伏している。秋月氏は日向国財部（高鍋）に移封されている。江戸時代の黒田藩の藩士であり、学者であった貝原篤信（益軒）の妻である東軒はこの秋月藩出身である。日本最後の仇討ちをおこなった秋月藩士臼井六郎の出身地がある。臼井六郎は 1873（明治 6）年に敵討禁止令後に親の敵討をし、本来は死罪であったが、裁判で士族としての身分刑が適用され終身刑に減刑されている。さらに、1889（明治 22）年大日本帝国憲法発布の特赦うけ 1891（明治 24）年 9 月 22 日に 34 歳で釈放となっている。その後、結婚し、夫婦で叔母の夫が経営する八坂運送店の横で饅頭屋を開き、さらに 2 年後八坂所有の鳥栖駅前八角亭という待合所を経営していたとのことである。緒方春朔は江戸時代の医学者で久留米藩出身であったが、秋月に移住し藩医となっている。春朔は長崎にいたころから種痘に関心を持ち、天然痘患者から採取した膿を使った人痘法をおこなった治療をした。野鳥橋の所に緒方春朔の碑、緒方春朔屋敷跡に説明板がある。

貝原益軒および臼井六郎については、参考文献〔1〕および〔2〕を参照していただきたい。

秋月宿

日本最後の仇討（臼井六郎）生誕地の碑（福岡県朝倉市秋月 688-2 の隣付近）

貝原益軒夫人（貝原東軒）生誕地の碑（福岡県朝倉市秋月 69-1 付近）

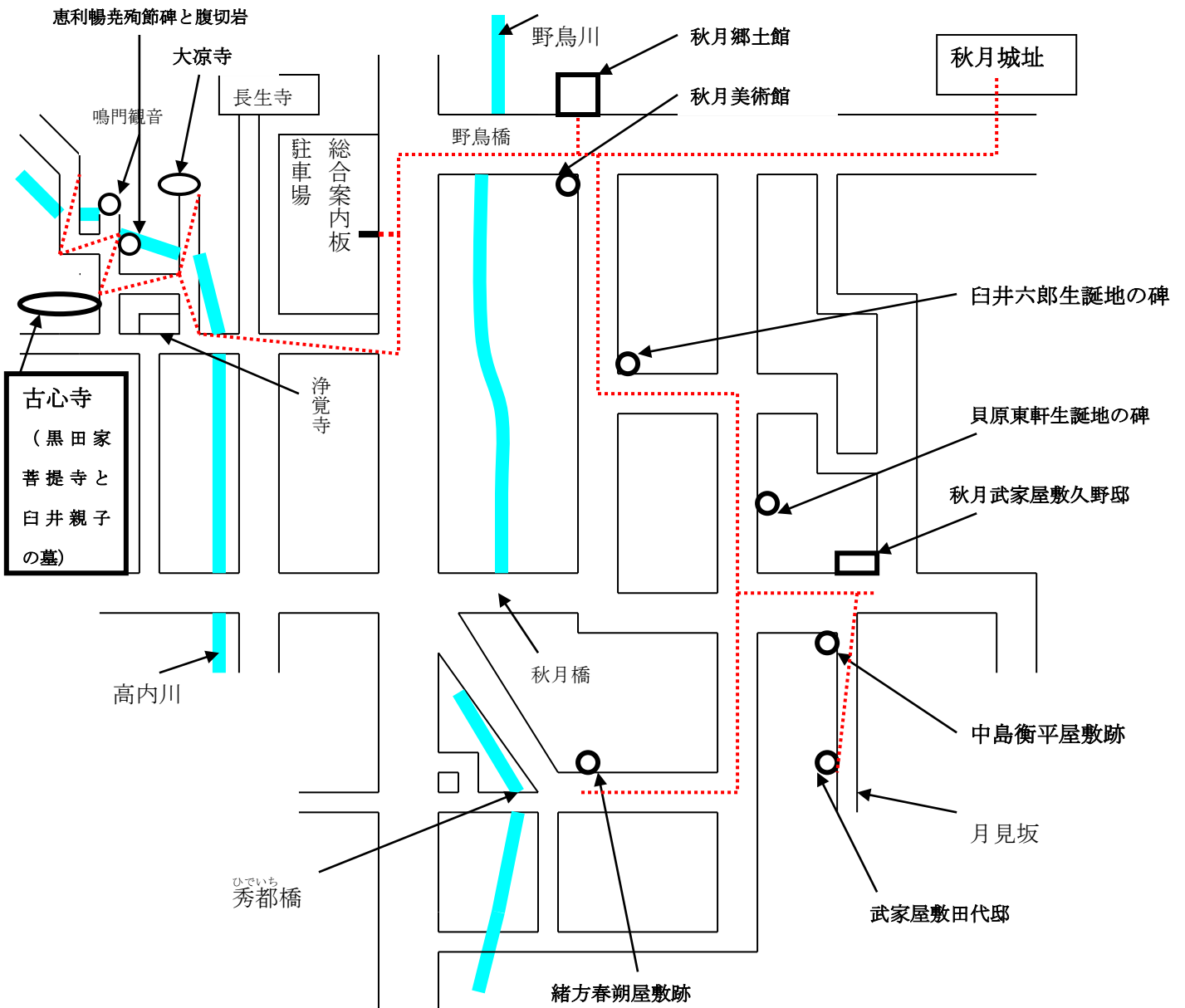
緒方春朔邸跡（福岡県朝倉市秋月 275 付近）

中島衡平屋敷跡（福岡県朝倉市秋月 187-1 付近）

武家屋敷久野邸（福岡県朝倉市秋月 83）

黒田長政公夫人大涼院殿菩提所（大涼寺）（福岡県朝倉市秋月 722）

古心寺（福岡県朝倉市秋月 757）





杉の馬場（秋月美術館）



白井六郎生誕地の説明板（秋月郷土館から西へ約 150m）



白井六郎生誕地の説明板



貝原東軒生誕地の碑



貝原東軒生誕地の碑



緒方春朔の説明板



緒方春朔の説明板



中島衡平の説明板



中島衡平の説明板



秋月武家屋敷久野邸



秋月武家屋敷久野邸（右）と、通りを挟んで中島衡平の説明板（左）



旧田代家住宅（武家屋敷住宅）



旧田代家住宅（武家屋敷住宅）



月見坂



月見坂の説明板



杉の馬場の桜



秋月城址（黒門）



野鳥川（野鳥橋から東側）



野鳥川（野鳥橋から東側）



野鳥橋の緒方春朔顕彰の碑



黒田長政公夫人大涼院殿菩提（大涼寺）



古心寺（黒田家菩提寺と臼井親子の墓）



腹切岩



えりのぶたか
恵利暢堯殉節碑

参考文献

- [1] 岡田武彦監修『ふくおか人物誌1 貝原益軒』西日本新聞社, 1993年7月.
- [2] 吉村昭『敵討』新潮文庫, 2003年12月. (115~208頁に「最後の仇討」として掲載)

唐津街道について

1. 芦屋宿（福岡県遠賀郡芦屋町）

唐津街道については、古から九州北部の玄界灘沿岸の重要な交通路で、江戸時代にも整備された街道の一つで、筑前国福岡領の若松から筑前国博多等を経由して肥前国松浦郡唐津（現；唐津市東城内）までの約 114 k m で、長崎街道の脇街道としての役割のほか、福岡藩、唐津藩、平戸藩、五島藩および大村藩など九州の西側の大名の参勤交代にも利用されている。唐津街道は、太閤道（名護屋城へ通じる道）とも関連しているし、長崎街道の大里、小倉、黒崎、木屋瀬から西に分かれて赤間（唐津街道）へのルートもあった。

ここで取り上げる芦屋宿周辺は福岡藩領となり、遠賀川の河川港であると同時に当時の軍港でもあった。河川港に番所が設けられ、秋月藩・東蓮寺藩貢米蔵、造船所などがあり、また米、櫛蠟および焚石などの産物出荷港であると同時に旅行商人（たびゆきしょうにん）による伊万里焼も船で全国に販売していた。この旅行商人の存在は、山鹿城の末裔と関係がある。山鹿城は安徳天皇や平氏一族をかくまったことに由来している。また、岡湊神社には伊万里商人との繋がりを示す献灯がある。詳細は参考文献[5]を参照されたい。



芦屋宿東構口



芦屋宿の町並み



福岡藩焚石会所跡



芦屋台場跡



劇場 大國屋跡



大國屋説明文（明治時代：収容 1000 人）



秋月藩・東蓮寺潘貢米蔵跡の碑



芦屋宿場構口跡（西側）



山鹿城址



山鹿城址本丸



岡湊神社



岡湊神社の献灯に伊万里商人の寄進者名

2. 他の唐津街道の写真



愛宕山ケーブルカー跡説明板：日本で2番目、九州で最初のケーブルカー（姪浜宿周辺）



愛宕山ケーブルカー山上駅跡：鎮西探題（鷲尾城）跡（姪浜宿周辺）



住吉宮（姪浜宿：福岡市西区姪の浜3）



唐津街道の説明板（姪浜宿）



探題墓（姪浜宿）



探題墓の由来（姪浜宿）



丸熊山探題出城跡（姪浜宿周辺）



興徳寺（姪浜宿）

参考文献

- [1] 芦屋町誌編集委員会『芦屋町誌』芦屋町役場，1991年6月.
- [2] 有田町史編纂委員会『有田町史 陶芸編』有田町，1987年12月.
- [3] 伊万里市史編さん委員会『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』伊万里市，2002年3月.
- [4] 廣崎篤夫『福岡県の城』海鳥社，1999年7月. 155～157頁.
- [5] 内山敏典「伊万里焼国内流通の歴史入門（1）」『柿右衛門様式学—“やきもの”の技法と歴史及び美—』九州産業大学柿右衛門陶芸研究センター，2011年7月. 95～109頁.

三瀬街道について

1. 金武宿（福岡市西区金武）と飯場宿（福岡市早良区飯場）

三瀬街道は筑前国唐津街道藤崎の追分から佐賀城下の長崎街道（龍造寺神社および日新小学校：築地反射炉付近）のに突き当たる。三瀬街道の起点は藤崎の追分も大正時代の地図に掲載の街道の起点は早良区高取 2-17-49 付近と明治時代の地図に記載の街道の起点は高取 1-28-24 付近である。江戸時代はこの辺りの地形は不明であるが 2 つの起点の距離はわずかである。佐賀の方も明確な終点は明らかでなく、長崎街道に接続する付近とした。その距離は約 46 km である。このルートには金武宿と山間部の飯場宿があり、肥前から筑前へは米や木炭などが金武宿に毎日馬十頭以上で運ばれ、荷馬車に積み替えて福岡へ運ばれている。また、筑前から肥前へは海産物や塩などが運ばれていた。飯場宿は松原邸という泊施設が一軒あった。金武宿は馬や人足の手配をする人馬継所で、荷物を積んだ馬の往来が多く、木賃宿や染物屋、質屋および雑貨屋などが軒を連ねており、他の街道と異なるのは参勤交代などの通行とは異なり、武士や商人などの旅人が多かったとのことであった。この三瀬街道の宿場は通行量に対して規模が小さかったので、住民から通行をおさえるよう要望があったといわれている。この三瀬街道は伊能忠敬一行の測量日記にも記載されている。

筑前の街道は「旧唐津街道」、「旧長崎街道」、「旧秋月街道」および「旧日田街道」が主要街道として有名であり、これらの街道は出版物で取り上げられ、またこれらの街道の一部の宿場町では現在「まちおこし」をおこなっている。筑前（近世中・後期の福岡藩領）は 21 宿（長崎街道の 6 宿を加えると 27 宿）があるが、筑前 21 宿のうち 2 宿（金武宿と飯場宿）がある「旧三瀬街道」については、地元住民でさえも宿場を持つ街道としての認知度をほとんどないように思われる。現在の『福岡市 都市圏 まちず』（2005 年）において、金武宿周辺の旧三瀬街道は県道 562 号線（飯場・金武線）として掲載されているが、一般県道と異なり、西山登山道口から直ぐ往くと廃道の状態となっており通行するには登山覚悟でつぎの宿場である飯場宿に往かなければならない。

「旧三瀬街道」とはどのような街道であったかという情報はほとんどない。わずかに伝承では「江戸時代は主として福岡から海産物を、佐賀からは米などを運ぶ主要な道として利用されていたということと、伊能忠敬がこの街道の測量をおこなったとの記述があり、2013 年 10 月 23 日が 200 年の記念にあたる。」ということである。そこで、以下に示す『早良郡志』、『筑前國續風土記』、『筑前國續風土記拾遺 下巻』、『筑前名所図会』および『福岡県史 近代史料編 福岡県地理全誌（六）』に掲載されている旧三瀬金武宿、飯場峠および飯場宿の記述を掲載した。これらの記述で一番古い時代から見えてくることは「旧三瀬街道」が曲淵氏の家臣の時代からで、これから言えることは戦国時代（1500 年代）からこの道が開かれたとのことで、江戸時代になってから交通量が増えて重要な道になっていったと思われる。それは、江戸時代になり、この街道が佐賀への最短ルートでまた長崎街道へも通じているということで、他国の旅行者や飛脚などの通行が絶えなかったとのことであ

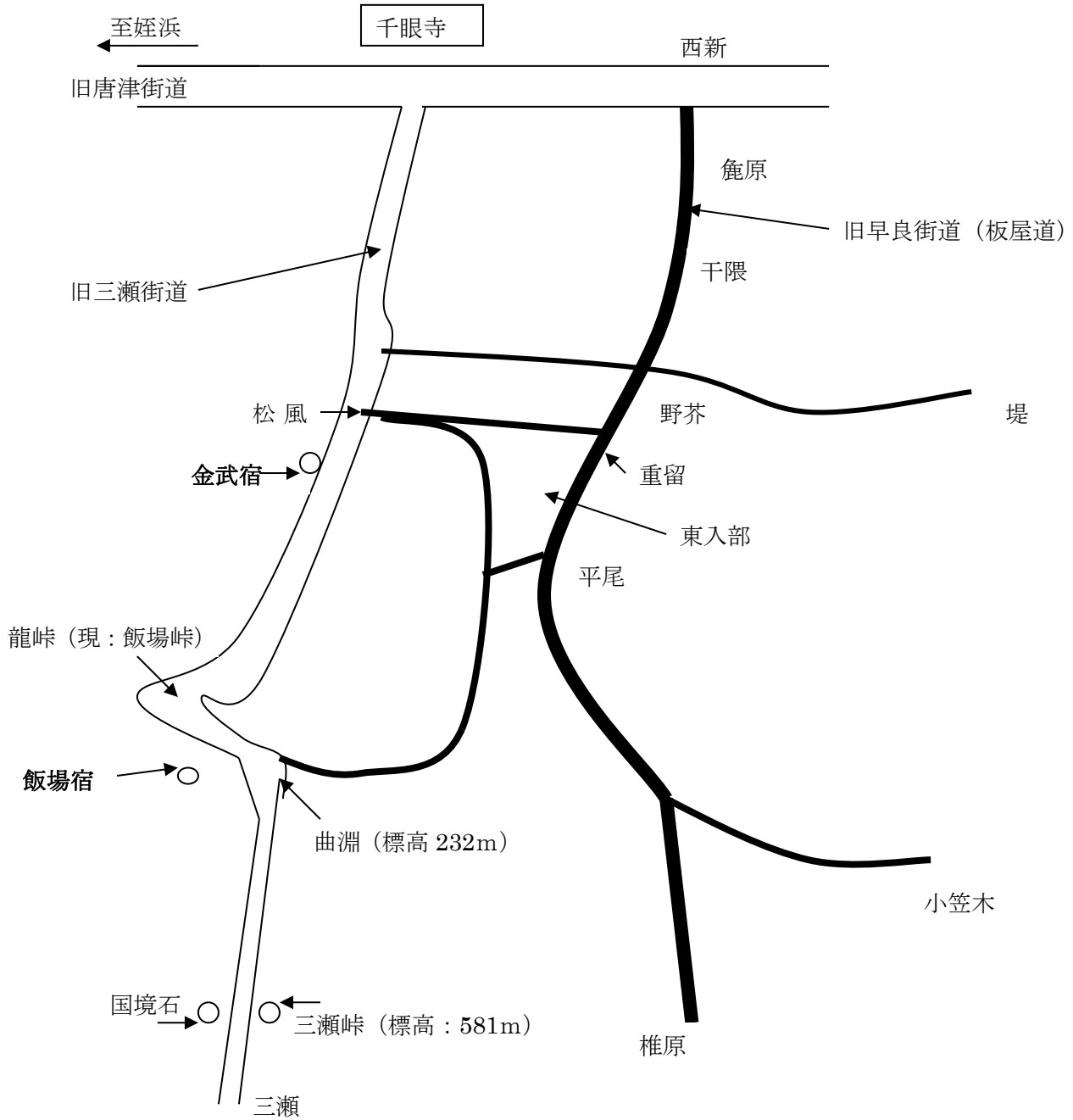
機能（人馬の調達など）を果たすことが出来ず、ついには寛政年間（1789～1801年）に地元民の願い出によって通行が原則禁止となっている。しかしながら、歴史的な記述があるように地元民などの道としての役割を果たしていたものと思われる。それは金武宿には醸造関係の蔵がおおく存在し、金武から福岡に往く現在の次郎丸旧道入口には蹄鉄屋があった。

「旧三瀬街道」が決定的に現在のように廃道に近い状態になったのは、1923（大正12）年に完成した曲渕ダムによって現在の263号線が整備され人の通行が安全になったことと、モータリゼーションの進行で運搬が楽になったことでこの街道の利用価値がなくなったことと思われる。

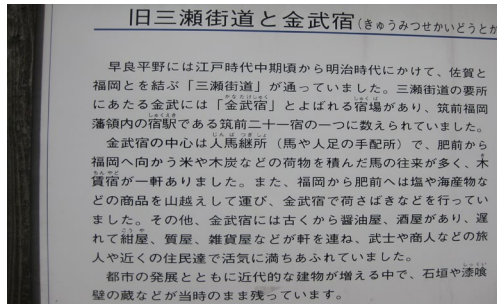
三瀬街道は福岡藩にとって佐賀および長崎に行くためには重要な街道であったが、山間部のためか金武宿と飯場宿は規模が小さかったので宿内の図を描けず、金武宿と飯場宿の位置を示すこととする。この三瀬街道の詳細については参考文献[1]を参照されたい。

金武宿と飯場宿

明治・大正期 (曲淵ダム建設前)



資料：福岡県早良郡役所編『早良郡志』名著出版,1973年2月. 103頁より作成.



旧三瀬街道と金武宿の説明板（福岡市西区金武）



金武宿（幾久鶴 酒造場跡）



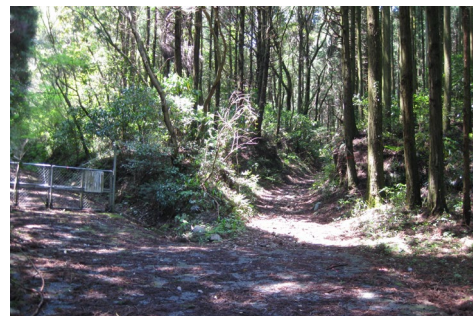
金武宿の町並み



西山登山道入口（県道 562 号線：飯場・金武線）



西山登山道入口から福岡市内遠望



分岐（左：砂防堰堤方面、右：旧三瀬街道）



側溝跡：旧三瀬街道



尾根道



飯場峠（最高地点の標高：382m）



飯場宿側の登山道出口（手前：県道 56 号線）



飯場宿（福岡市早良区飯場）



飯場宿：松原邸（飯場宿時代からの居住）



旧三瀬街道：三瀬峠（県境）



南肥前国、北筑前国の国境石（旧三瀬峠：佐賀に向って右側の上

参考文献

- [1]内山敏典『旧三瀬街道とその周辺逍遥マップ記—伊能忠敬一行の測量から 200 年を経過して—』九州産業大学産学連携室, 2015 年 4 月.

中山道について

1. 草津宿（滋賀県草津市草津）

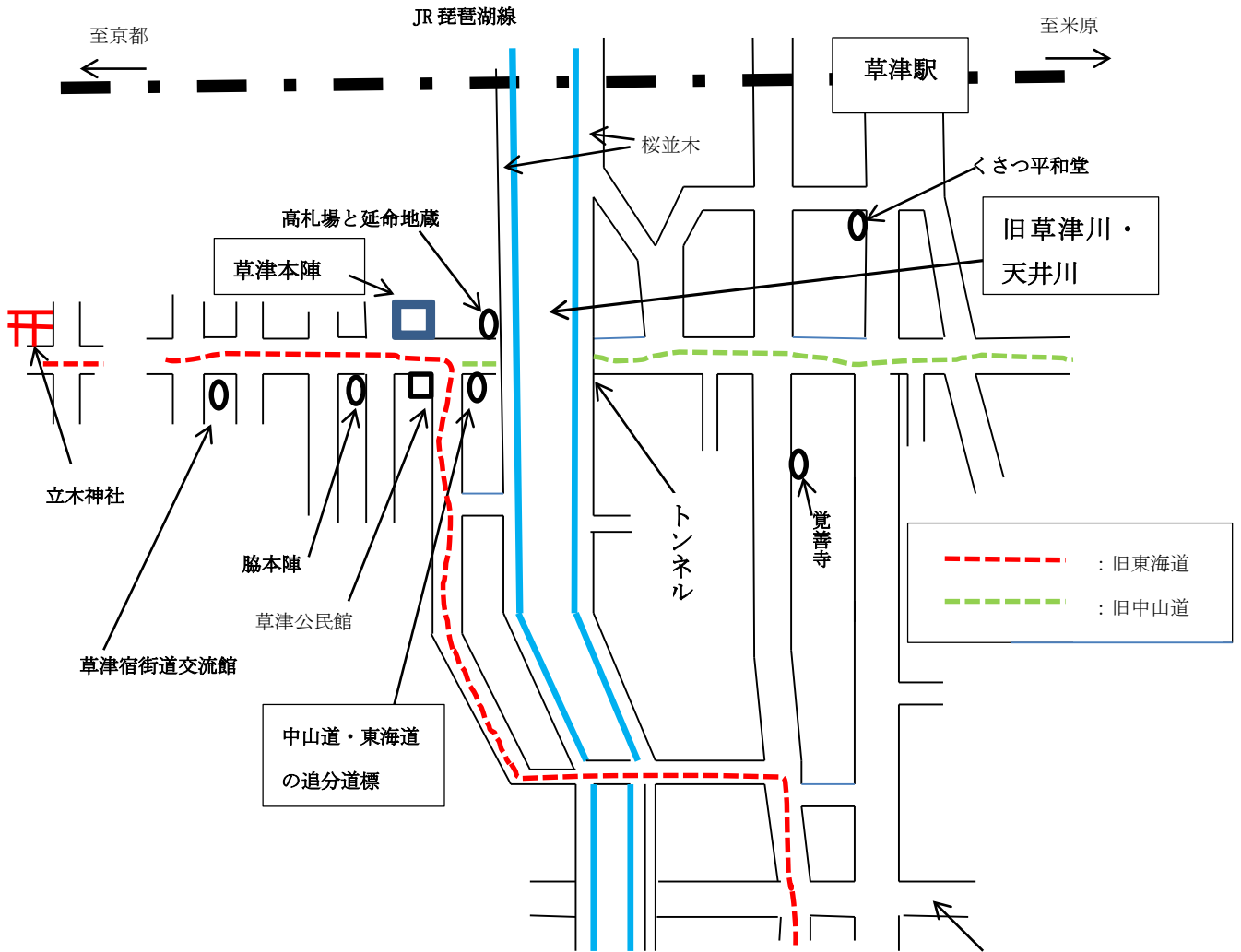
中山道は江戸の日本橋から近江草津までの約 508 km で 67 ヲ所の宿場が置かれ、さらに京都間の約 526 km で 69 ヲ所の宿場（69 の宿場は大津宿）が置かれていた。中山道は内陸の山間部を通っているため、とくに冬場の通行は厳しく東海道に比較し宿場が多い。

草津宿は江戸時代、中山道と東海道が分岐あるいは合流する宿場として栄えたところである。草津宿は東海道五十三次の 52 番目の宿場であり、中山道の六十九次 68 番目の宿場である。草津宿には、国史跡草津宿本陣、高札場、追分道標、「草津川跡地公園 de 愛ひろば」（旧草津川・天井川）などがある。

草津宿本陣は江戸時代、宿場に置かれ、大名や公家などが休泊した本陣である。この本陣には幕末に皇女和宮が第 14 代将軍の徳川家重に嫁ぐ道中に立ち寄ったところとして有名である。本陣内（延 4726 平方メートル）には、上段の間（座敷部の最も奥にある一番格式の高い部屋で、一行の主客が休泊する部屋。中央に「置畳」という二畳分の畳が置かれている。また、そこには床の間・違い棚・書院を備えているほか格天井が備えられている。）、畳廊下（上段へと通じる廊下、本来は襖がたてられていて、利用人数が多いときには部屋として利用されていた。通常本陣には 30～40 人の宿泊可能。畳廊下を利用すれば 70 人余り宿泊できる。）、湯殿（主客専用で、お湯は屋外にある「湯沸かし屋形」で沸かしたものを湯船まで運び入れていた。床は板張りで、排水用の溝が切られている。湯船の大きさに対し部屋が広いのは、外からの攻撃が届かないようにするためとされている。）、庭園（主客の目を楽ませるために、築山がつくられ、手入れが施されていた。）、板間（東海道に面した荷解き場）、住居部（本陣の当主、材木商を営んでいた田中家の住まい。「店の間」と呼ばれた帳場が東海道に面した位置にある。）、台所土間（一度に多人数の調理ができるように、五連式のかまどなどが備えられている。大小 2 つで、一度に 30 人分の食事を準備できた。）、御除ヶ門（およけもん：本陣の敷地の北端に位置した門で、本陣の主客の非常時にこの門から出て、草津宿の南端にある立木神社へと避難することになっていたとのこと。）、土蔵（4 棟あり、うち 2 棟は布団蔵などに利用。）、長屋（塩や醤油などを保管するのに使用された。）などで構成されていたとのこと、全国でも最大級であるとのことである^{注 1)}。高札場は追分道標（中山道と東海道の追分）の反対側にあり、横に延命地藏が祀られている。この高札場には、番所からのさまざまな通達が出されるごとに高札が掲げられるとのことである。高札場や追分付近からの坂を登れば旧草津川・天井川（川底に土砂が堆積し続け、その都度堤防を高くしていった結果、川床が周辺の土地より高くなっている。）に行く。この高札場は旧草津川・天井川の下に 1886（明治 19）年に掘られたトンネルの傍にある。

なお、以下の写真は午前 9 時頃の写真である。

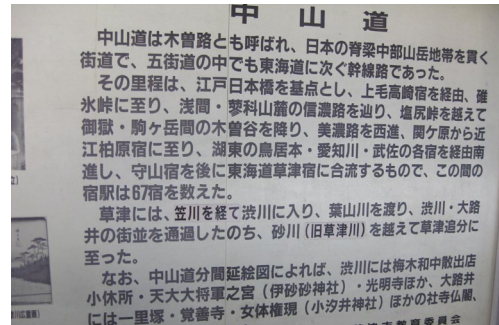
草津宿



現在、旧草津川・天井川は「草津川跡地公園 de 愛ひろば」となっている。この公園は草津放水路（新草津川）が完成したことによるものである。草津川放水路は草津川と金勝川（コンゼガワ）の合流点から琵琶湖まで新しい水路を開削し、流域の治水を行うためのものである。これによって、旧草津川・天井川は「草津川跡地公園 de 愛ひろば」（区間5）として、桜並木、自転車道、歩行者道、レストラン等が整備され市民の憩いの場となっている。



草津駅前にある「くさつ平和堂」



草津駅前にある中山道の説明板



高札場と延命地蔵



中山道と東海道との追分道標



追分の説明板



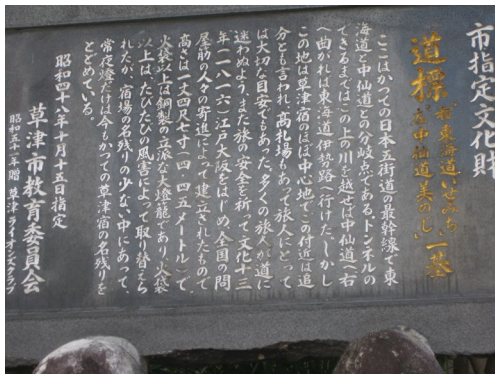
高札場・延命地蔵横から天井川への坂



市民の憩いの場の公園化の前の天井川



市民の憩いの場の公園化の前の天井川



追分道標の説明の碑



トンネル近くの本陣案内標識



史跡草津本陣跡



史跡草津本陣跡



史跡草津本陣跡



右：草津脇本陣跡



草津脇本陣跡の碑



草津夢本陣（草津宿街道交流館）



草津宿商店街



草津まちづくり株式会社



草津協本陣



覚善寺前の追分道標



覚善寺前の追分道標

注1) <https://www.city.kusatsu.siga.jp/honjin> より引用。

東海道について

1. 品川宿（東京都品川区旧東海道：北品川駅から青物横丁駅付近まで）

品川宿に関しては現在の品川宿の説明板からの引用し説明している。品川宿は東海道五十三次の宿の中で諸街道の最初の宿場町である。旅人は品川宿を經由して西を目指し、また家路についた事から、東海道の玄関口として栄え、宿内の家屋は 1600 軒、人口 7000 人規模で賑わっていた。現在の道幅は江戸時代と同じ道幅を保っている。品川宿は、江戸時代に入り、東海道宿駅伝馬制度が定められたことから第一の宿となっている。沿道には由緒ある寺社が多く、本陣跡の聖蹟公園、飯売旅籠屋「相模屋（妓楼）」、往時の名残の履物店・米穀店、東海道の風情をとのことで他地域の「宿」から松の植樹がなされている。

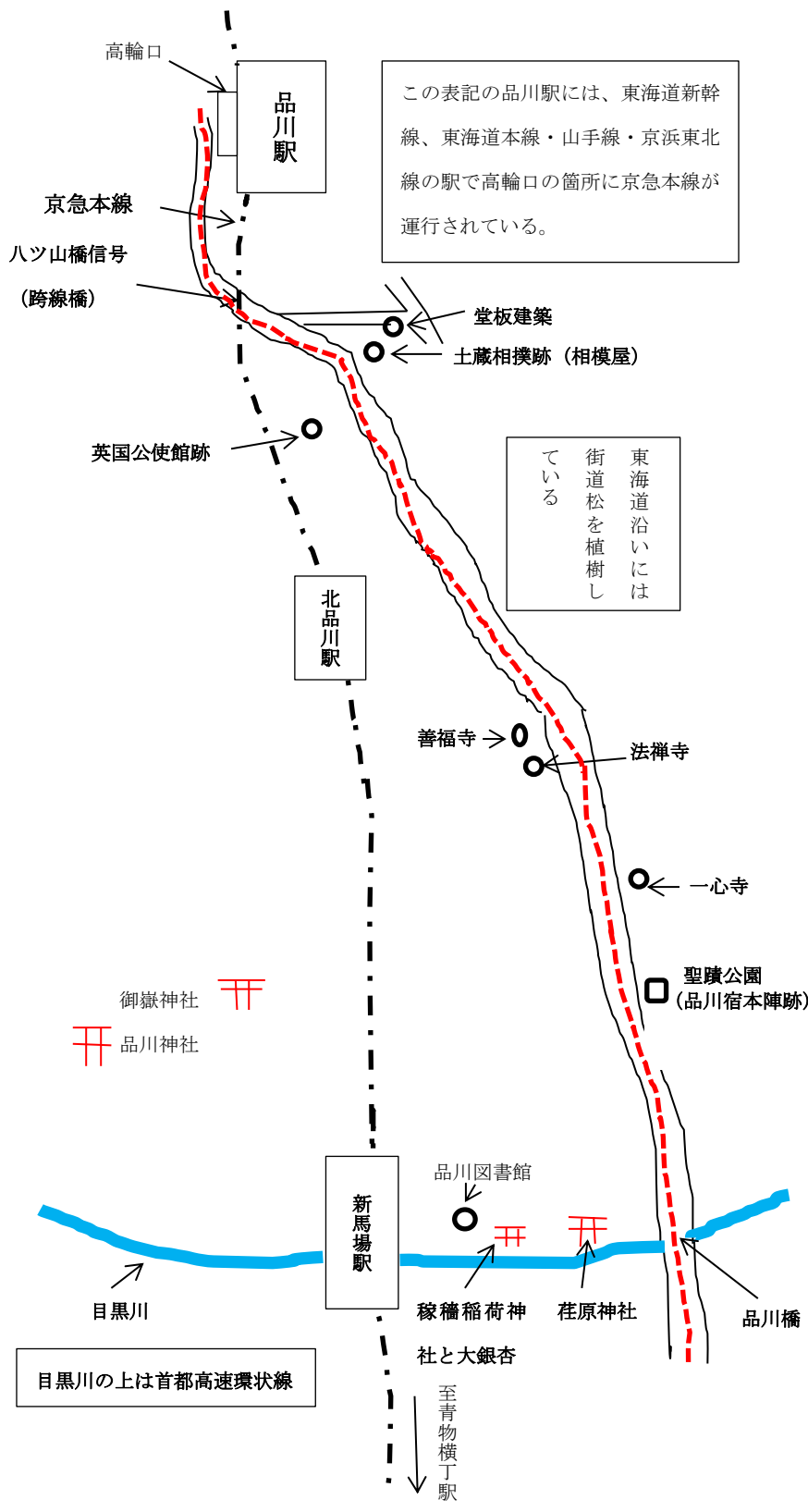
聖蹟公園は品川宿本陣跡で、1872（明治 5）年に宿駅制度が廃止された後は警視庁品川病院となり、1938（昭和 13）年に公園として整備され現在に至っている。この聖蹟公園という名は 1868（明治元）年の明治天皇東行（とうこう）の際に行在所（あんざいしょ）となったことに由来している。また、品海公園には日本橋より二里の碑があり、花壇はかつて海岸線の土止めに積まれた石垣を利用し、松も植樹されている。

土蔵相撲跡は旅籠屋を営む相模屋の外壁が土蔵のような海鼠壁だったことから「土蔵相模」と呼ばれていた。1862（文久 2）年品川御殿山への英国公使館建設に際して、攘夷論者の高杉晋作[たかすぎ しんさく：1839（天保 10）年～1867（慶応 3）年：長州藩士、藩校明倫館、松下村塾、江戸の昌平黌に学ぶ、帰国後藩校明倫館で講義をする。尊王攘夷派]^{注1}や久坂玄瑞[くさか げんすい：1840（天保 11）年～元治元]年：長州藩士で松下村塾に学び、吉田松陰の妹を妻とし、尊皇攘夷論を唱える]^{注2}らは、この土蔵相模で密議をこらし、1862 年 12 月 12 日夜半に焼き討ちを実行している。ここは幕末の歴史の舞台となった所でもある。

稼穡（かしよく）稲荷神社は五穀豊穰・商売繁盛の神（宇迦之売命：うかのひめのみこと）で、神木のイチョウは品川区指定天然記念物で、高さ 23m 以上、樹齢 500～600 年とされている。

荏原神社は 709（和銅 2）年 9 月 9 日、奈良丹生上川（にゅうかみかわ）神社より高麗神（龍神）を勧請して創建されている。

品川宿





旧東海道品川宿



旧東海道から海側の堂板建築



北品川宿 2 の愛知県御油宿の街道松



土蔵相撲跡の説明板



旧東海道の町並み



旧東海道の裏通り



藤沢宿の兄弟松の説明板



善福寺（時宗：北品川 1-28-9）



品海公園（北品川 1-30-9）



東海道品川宿の説明板



品川小学校発祥之地の碑と法禅寺（浄土宗：北品川 2-2-14）



丸屋履物店：創業 1865（慶応元）年
江戸の履き倒れ：北品川 2-3-7



新実商店（米穀：昭和初年に建築、二軒長屋：北品川 2-4）



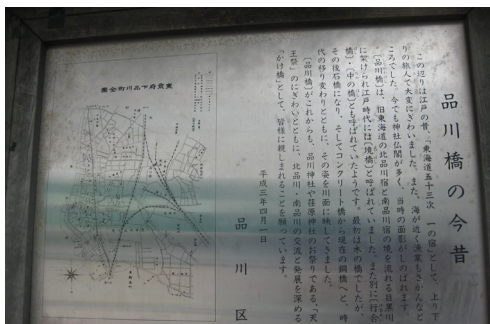
品川成田山一心寺（成田山分身の不動明王がまつられている）



品川宿本陣跡（聖蹟公園：北品川 2-7-21）



聖蹟公園



「品川橋の今昔」の説明板



品川橋



荇原神社 1 (北品川 2-30-28)



荇原神社 2



品川区指定天然記念物 稼穡稲荷のイチョウの説明板 (北品川 2-32-3)



稼穡 (かしよく) 稲荷のイチョウ

注

注 1) 参考文献[1]の 730 頁から引用。

注 2) 参考文献[1]の 439 頁から引用。

参考文献

[1]三省堂編修所編『コンサイス日本人名事典』(改訂新版)三省堂, 1999年10月.

[2]昭文社『ハンディマップル東京詳細便利図』昭文社, 2016年.

その他の宿場町について

1. 筑後吉井宿（福岡県うきは市吉井町）

筑後吉井宿は江戸時代に久留米（有馬藩）と天領日田を結ぶ豊後街道の宿場町である。吉井宿は筑後川流域にあり 2005 年 3 月 20 日に浮羽町と合併し、うきは市として市制施行している。写真は筑後吉井宿の町並みである。



2. 肥前浜宿（佐賀県鹿島市浜町）

肥前浜宿は江戸時代から昭和時代にかけて酒および醤油などの醸造業を中心に発展した地域で、現在は酒蔵通りがある。肥前浜宿は長崎街道の佐賀県の牛津宿と小田宿との間の追分から有明海沿いに長崎街道の長崎県の永昌宿（諫早）に接続する多良街道（鹿島宿、浜宿、多良宿および湯江宿）にある。写真は肥前浜宿の町並みである。





おわりに

各街道の宿場町は参勤交代のため本陣、脇本陣および旅籠などは規模の大小はあるものの共通している。そこに存在する宿場町は、一部を除けば、地域特性に合わせた日本式プロト工業（手工業）が関係している。

わが国においては、人口減少、少子高齢およびコロナ禍による経済社会構造の変容などがあり、加えて国際紛争およびSDG sの問題がある。そのような問題解決の手がかりとなるのが、人口がマクロ的に一定の江戸時代である。人口は生産の担い手であり、消費の担い手でもある。この江戸時代の各宿場町は、宿駅傳馬制度によって成立してきたとはいえ、この各宿場町が果たしてきた役割は大きい。宿場町は旅籠、酒および醤油などの醸造業、鍛冶屋、織機などさまざまな生業が成立しており、農村部からの人口の移動による増加であった。宿場町は在郷（宿場町）に移動的人口増加の上述の日本式プロト工業化があり、いまでいう宿場町独自の伝統的技術の発展があった所といえる。この宿場町は日本の原風景がある地方の観光資源が残っているところが多く存在している。現在の宿場町は伝統的構造物群保存地区制度があり、市町村の主体性を尊重しながら、都市計画と連携しながら、歴史的な集落や町並みの保存と整備をおこなってきている。しかしながら、各宿場町によってはうまくいっている所と、そうでない所とがある。

現在の各宿場町は都市のなかに位置しているものもあれば、そうでない所に位置しているものもある。コロナ禍前において、都市に位置している宿場町は国内外からの観光客が訪れているが、そうでない宿場町は観光客に限りがあり、「まちおこし」をおこなうための仕掛けが必要である。単独の「まちおこし」ではなく、各宿場町の過去の地域特性を生かし、“身の丈に合った”開発が必要であろう。たとえば、コロナ禍が起こるとは考えられなかった状況の時、多くの観光客が訪れるからといって大規模の宿泊施設や商業施設を誘致した場合、コロナ禍やエネルギー逼迫による物価高騰で、それらの施設は成り立たなくなる。そこに“身の丈に合った”開発が必要となる。

コロナ禍後の国内外からの観光客はわが国の原風景の地域を SNS などで情報を得ている。そこで、担当者はそれらを踏まえた整備をおこなうとともに、身の丈に合わない施設を他の地域との連携で補うことが必要であろう。そのために、都市との交通の利便性を行政とともにおこなう必要があるであろう。

【著者紹介】 内山 敏典（うちやま としのり）

現在、九州産業大学名誉教授

専攻：統計学, 計量経済学

経済学修士

博士（農学）

【地域史著書】

『早良逍遥マップ記—歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ—』（単著）城島印刷, 2003 年.

『続 早良逍遥マップ記—鉄道跡を歩いて、未来に繋ぐ—』（単著）城島印刷, 2005 年.

『福岡都市圏歴史散策マップ記』（単著）九州産業大学産学連携室, 2009 年.

『福岡（筑前）およびその関連地域の歴史散策マップ記—とくに高取焼および元寇を例とした「まちおこし」のための文化・歴史について—』（単著）九州産業大学産学連携室, 2011 年.

『旧三瀬街道とその周辺逍遥マップ記—伊能忠敬一行の測量から 200 年を経過して—』（単著）九州産業大学産学連携室, 2015 年.

『唐津・多久・大町地域周辺散策記—歴史的遺産を通じて、現在・過去・未来を考える—』（単著）九州産業大学, 2017 年.

『路地から見る歴史と文化—「まち」おこしでの財産を活かすため—』（単著）九州産業大学, 2018 年.

『筑紫国（福岡県）周辺の古代城跡からみる歴史—「まち」おこしとしての財産を活かすため—』（単著）九州産業大学, 2020 年.

『西油山および荒平山周辺の歴史散策マップ記』（単著）地域史と統計処理のさわらラボ, 2020 年.

『早良逍遥マップ記拾遺—中世および近世の灌漑用水とその関連遺構—』（単著）地域史と統計処理のさわらラボ, 2021 年.

【主要専門著書】

『アンケート調査に基づく専門教育科目の授業効果分析』（共著）九州大学出版会, 1989 年.

『消費需要の計量的分析—食肉消費を事例として—』（単著）晃洋書房, 1992 年.

『間接税改革の国際比較』（共著）九州大学出版会, 1993 年.

『統計解析技法』（単著）晃洋書房, 1993 年. 『消費構造の変容とその統計的分析』（単著）晃洋書房, 1995 年.

『余暇関連財需要の計量的分析』（単著）晃洋書房, 1998 年.

『増補 統計解析技法』（単著）晃洋書房, 1998 年.

『計量分析のための統計解析技法』（単著）晃洋書房, 2002 年.

『看護統計テクニック—基本からパス分析まで—』（監修）医歯薬出版, 2003 年.

- 『トピックス統計解析技法—電卓, Excel および VBA における計算法—』(単著) 晃洋書房, 2006 年.
- 『基本計量経済学』(共著) 勁草書房, 2006 年.
- 『経済・心理・医療・看護等の教育のためのベーシック統計解析技法—電卓, Excel およ VBA における計算法—』(単著) 晃洋書房, 2008 年.
- 『有田・伊万里および福岡地域における消費者の意識調査分析—新しい陶磁器需要創造および生産構造をめざして—』(共著) 九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター, 2009 年.
- 『柿右衛門様式学—“やきもの”の技法と歴史及び美—』(共著) 九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター, 2011 年.
- 『統計解析の基礎—データ解析の基本と実践—』(単著) 晃洋書房, 2015 年.
- 『経済・経営・心理・医療・看護等指導者のためのアンケート調査データ解析の技法—ACCESS・EXCEL ソフト、F-BASIC・十進 BASIC・VBA プログラムそれぞれの利用方法—』(単著) MyISBN - デザインエッグ社, 2018 年.
- 『九州地域における伝統産業需要の計量分析—公統計・アンケート調査をベースに—』(共著) 九州産業大学伝統みらい研究センター, 2022 年.

【主要専門論文・COE ・科研費論文の一部】

- “An Analysis of Meat Consumption by a Dynamic Model—Estimation of Short-Run and Long-Run Elasticities —”, *Office of Agricultural Economics* No. 12, Department of Economics, Fukuoka University, March 1978.
- 「畜産物消費の回帰主成分分析」『農業経済研究』第51巻第3号, 日本農業経済学会, 1979.
- 「MULTIPLE CLASSIFICATION ANALYSISによる英語授業効果分析—東海大学工学部福岡教養部を例として—」『東海大学外国語教育センター紀要』第5輯, 東海大学, 1985年.
- 「成人女性の食生活意識調査に基づく肉類需要分析—福岡市と佐賀市および両周辺地域を一例として—」『季刊家計経済研究』通巻第11号, (財)家計経済研究所, 1991年.
- 「消費需要の所得階層間分析」『季刊家計経済研究』通巻第23号, (財)家計経済研究所, 1994年.
- 「陶磁器需要の統計的分析—柿右衛門様式陶磁器需要との関連性について—」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第2号, 文部科学省 21世紀COEプログラム:九州産業大学, 2006年.
- 「徳川幕府期における伊万里焼国内流通の研究—筑前における陶器商人の役割を例として—」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第4号, 文部科学省21世紀COEプログラム:九州産業大学, 2008年.
- 「陶磁器需要推移の統計的分析—主として、マイクロデータに基づく多重分類分析によるアプローチ—」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第5号, 文部科学省 21世紀COEプログラム:九州産業大学, 2009年.
- 「少子高齢社会における食料問題意識に関するコンジョイント分析」『エコノミクス』第10巻第1

- 号,九州産業大学経済会.2009年.
- 「地域産業が地域経済に及ぼす影響の計量分析」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第9号,柿右衛門陶芸センター.2013年.
- 「佐賀県における諸富家具生産者の意識調査分析」柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第10号,柿右衛門陶芸センター.2014年.
- 「福岡県の伝統産業とその関連産業の構造分析—福岡県の産業連関表による計量分析—」柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第12号,柿右衛門陶芸センター.2016年.
- 「唐津焼窯元の作陶に対する共通意識の計量分析」『伝統みらい研究センター』第1巻第1号,柿右衛門陶芸センター.2018年.
- * 「伝統工芸品の需要構造分析—「家計調査」に基づく金額弾力性と数量弾力性からのアプローチ」『伝統みらい研究センター』第1巻第2号,柿右衛門陶芸センター.2019年.
- * 「日用品としての陶磁器の品質と価格に関する消費者意識の一考察—多重分類分析を用いたアンケート調査データの解析から—」(共著)『日本計画行政学会九州支部』第43号,2019年.
- * 「博多織需要に関する成人女性意識の計量分析」『伝統みらい研究センター』第1巻第3号,柿右衛門陶芸センター.2020年.
- * 「アンケート調査に基づく専業主婦の陶磁器需要分析—購入頻度からのアプローチ—」『中央大学経済学論纂』第60巻第5・6号(田中廣滋教授記念号).2020年.
- * 「「家計調査」にみる伝統工芸品需要の時系列分析」『伝統みらい研究センター』第1巻第4号,柿右衛門陶芸センター.2021年.
- など多数。
- なお,*印はJSPS科研費JP18K00249、JSPS科研費JP19K00269の助成を受けた論文である。

江戸時代から続く街道の宿場町
—いろいろな宿場町の特徴—

2023 年 4 月 2 日 初版発行

著 者 内山 敏典

発行 地域史と統計処理のさわらラボ

<http://www.ut.saloon.jp/index10.htm>

E-mail : uchiyama4396@minos.ocn.ne.jp

非売品

© Uchiyama Toshinori